



2020年10月8日

報道関係者各位

慶應義塾大学

**慶應義塾ミュージアム・コモンズ、****アーティスト・大山エンリコイサム氏によるコミッション・ワークを公開**

2021年春にオープンする慶應義塾の新しい大学ミュージアム「慶應義塾ミュージアム・コモンズ (KeMCo)」は、施設内の先進的なクリエイション・スタジオ「KeMCo Studi/O (ケムコ・スタジオ)」に、大山エンリコイサム氏によるコミッション・ワーク「FFIGURATI #314」を設置します。大山エンリコイサム氏のアート・ワークは、10月26日(月)～10月30日(金)のKeMCo プレビューイベント内で公開予定です。また、10月28日(水)には、大山エンリコイサム氏によるオンライントークイベントを開催します。

**1. 概要**

慶應義塾ミュージアム・コモンズ(※1)は、慶應義塾が160年を越える歴史の中で形成した、さまざまな領域にわたる文化財コレクション、そしてその背後にある教育・研究活動をつなぐハブとなる機関です。KeMCoは、リアル(アナログ)とデジタルが融け合う展示・教育・研究プログラムを準備することによって、多様なコレクションと活動をつないでいく予定です。

このKeMCoの活動を支えるユニークなスタジオが、最新のデジタル撮影・計測機材と、デジタル・ファブリケーション設備を備える「KeMCo Studi/O (ケムコ・スタジオ)」(※2)です。このスタジオでは、ミュージアムにおける展示・収蔵の実践と間近に接しながら、デジタル・オブジェクトと実作品の関係を体験を通じて学び、メディア横断的な創造を展開することができます。

慶應義塾の卒業生でもある大山エンリコイサム氏(※3)は、ストリート・アートから出発した独自のモチーフ「クイックターン・ストラクチャー」を起点にメディアを横断し表現する美術家です。大山氏の関心と、デジタルとアナログを架橋するKeMCoのコンセプトが重なり合ったことから、ケムコ・スタジオの、ひいてはKeMCoのシンボルとなる作品の制作をお引き受けいただきました。

施設の竣工にともない、9月25日(金)から現地での制作が開始されました。大山エンリコイサム氏のアート・ワーク「FFIGURATI #314」(※4)は、10月26日(月)からのKeMCo プレビューイベントで公開されます。

## 2. 関連イベント

### (1) 大山エンリコイサム トークイベント

大山エンリコイサム × 渡部葉子 (ミュージアム・コモンズ 副機構長/アート・センター教授)

日 時 : 2020 年 10 月 28 日 (水) 18 時 30 分 ~ 20 時 30 分

Zoom webinar で開催します。事前登録制です。

登録ページ

[https://keio-univ.zoom.us/webinar/register/WN\\_FF6A1xjbTCCpagpgtFYeDw](https://keio-univ.zoom.us/webinar/register/WN_FF6A1xjbTCCpagpgtFYeDw)

### (2) KeMCo プレビューイベント内でのアート・ワーク公開

日 時 : 2020 年 10 月 26 日 (月) ~ 10 月 30 日 (金)

公開方法 : オンライン公開

※イベント詳細については、KeMCo ウェブサイト ( <https://kemco.keio.ac.jp/> ) をご参照ください。

## <用語説明>

### ※1 慶應義塾ミュージアム・コモンズ (KeMCo)

慶應義塾は、160年を越える歴史の中で、多様な領域にわたる文化財コレクションを形成してきた。これらのコレクションは、その専門領域に応じて、塾内のさまざまな場所に収蔵され活用されている。慶應義塾ミュージアム・コモンズは、慶應義塾のコレクションとその背後にある教育・研究活動を、自律性を保ちながらつなぐ「ハブ」となる機関だ。アナログとデジタルが融け合う環境を構築し、展覧会、イベント、講義、調査・研究やデジタル・アーカイヴなどを通じて、慶應義塾のアート&カルチャーを社会に開くことを目指している。2021年春にグランド・オープン予定。活動拠点である慶應義塾大学東別館には、展示室、収蔵庫、クリエイション・スタジオ (KeMCo Studio/O) などを備える。東別館の竣工にともない、10月26日(月)より1週間、オンラインを中心にプレビューイベントを開催する。

### ※2 KeMCo Studio/O (ケムコ・スタジオ)

3D スキャンにも対応した撮影・計測を行うデジタル化機能と、デジタルデータを用いて、3D プリンタなどの工具を駆使して工作を行うファブリケーション機能を兼ね備えたクリエイション・スタジオ。ミュージアムにおける展示・収蔵の実践と間近に接しながら、デジタルとアナログの関係を体験を通じて学ぶとともに、メディア横断的な創造を展開することができる。

かつてない量のデジタルデータが流通し、デジタル空間にあるオブジェクトの体験がリアルな体験に先行する現代において、デジタルとリアル (アナログ) のオブジェクトの間にどのような関係があるのか、現実のオブジェクトのなにがデジタル化され、なにが抜け落ちるのかを体験しながら考え、学ぶ必要があるという問題意識に基づき設置された。

### ※3 大山エンリコイサム

1983年東京都生まれ。2007年慶應義塾大学環境情報学部卒業、2009年東京芸術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。

エアロゾル・ライティングのヴィジュアルを再解釈したモチーフ「クイックターン・ストラクチャ

ヤー（QTS）」を起点にメディアを横断する表現を展開し、現代美術の領域で注目される。

高校在学中にエアロゾル・ライティングに関心を抱き、70-80年代のニューヨークを中心とする同文化の影響のもと、線の反復と広がりによる白黒の立体パターンをかきはじめる。その後、同モチーフを「クイックターン・ストラクチャー」と名づけ、現代美術とストリート文化のボーダーで表現を続けている。

主たる個展は、「Kairosphere」（ポーラ美術館、2019）、「VIRAL」（中村キース・ヘリング美術、2019）、「INSIDE OUT」（タワー49 ギャラリー、NYC、2019）、「ユビキタス—大山エンリコイサム」（マリアンナ・キストラ・ビーチ美術館、カンザス、2017）など。著書に、『エアロゾルの意味論—ポストパンデミックの思想と芸術』（青土社、2020）、『ストリートアートの素顔—ニューヨーク・ライティング文化』（青土社、2020）、『ストリートの美術—トゥオンブリからバンクシーまで』（講談社選書メチエ、2020）、『アゲインスト・リテラシー—グラフィティ文化論』（LIXIL 出版、2015）、『美術手帖 2017年6月号 エアロゾル・ライティング特集』（企画・監修）など。コム・デ・ギャルソンやシュウ ウエムラともコラボレーションするなど、多角的に活動している。

■大山エンリコイサム展「夜光雲」

日 時：2020年12月14日（月）～2021年1月23日（土）

場 所：神奈川県民ホールギャラリー

詳 細：<https://yakouun.net/>

ウェブサイト：<https://www.enricoisamuoyama.net/>

Twitter：[https://twitter.com/enrico\\_i\\_oyama](https://twitter.com/enrico_i_oyama)

Instagram：<https://www.instagram.com/enricoisamuoyama/>

※4 「FFIGURATI #314」

「FFIGURATI」は「Graffiti」（グラフィティ）とイタリア語の「figura ti」（フィグーラティ：自身で象れ）を合わせた造語。大山エンリコイサムが一貫して描くモチーフである「クイックターン・ストラクチャー」に対し、「FFIGURATI」は、固有のメディウム（素材）や技法をもつ個別作品を示し、作品ごとに番号が付与されている。ケムコ・スタジオに設置された#314では、大山エンリコイサムが新たなメディウムに挑戦している。

※ご取材の際には、事前に下記までご一報くださいますようお願い申し上げます。

※本リリースは文部科学記者会、各社文化部等に送信させていただいております。

---

【本発表資料のお問い合わせ先】

慶應義塾広報室（安延）

TEL：03-5427-1541 FAX：03-5441-7640

Email：m-pr@adst.keio.ac.jp <https://www.keio.ac.jp/>